

多文化国家日本と比較民俗学

佐々木高明※

最近、地方分権がやかましくいわれている。とくに昨年の政権交代後は「地方主権」への道が現実味を帯びてきている。だが、よく考えてみると、我々は百年余り前に、この中央集権から地方分権へ方向とはちょうど逆の道を必死で歩んだことがある。典型的な地方分権制であった幕藩体制を否定して、中央集権的な近代国民国家を作るべく、明治政府は大変な努力を重ねた。廃藩置県、地租改正、戸籍の制定、徴兵制、殖産興業政策の実施など、近代国家の諸制度を整備するとともに、全国的に学校教育制度を普及させ、国定教科書をつくり、「国語」を設定して標準語化を強力に進めるなど、画一的で均質な国民文化の形成を明治政府は急いだ。その結果、「日本人」という強いナショナル・アイデンティティが、明治の中頃には作り出されるようになったようである。

現在、我々が「日本文化」として広く受け入れているのは、この近代国民国家の形成とともに作り出された画一的な国民文化だと言って間違いない。それは近代国家の諸制度が整備され、情報伝達手段が発達するのに伴って日本列島の全域に広がり、日本の文化の表層を覆いつくすようになったということができる。

とくに昭和初期頃以降、国家主義的な傾向が強くなるとともに、日本の国家と国民は、多元的で多様な特色をもつものではなく、天皇制のもとで単一・同質のものとする国家論・国民論が大きな勢力を占めるに至った。

しかも、この傾向は言論の自由が確保された戦後にまで受継がれたようである。例えば1980年代には、時の首相が「日本は単一民族の国家だ」と国会で発言して物議を醸したことがあるし、その後も同様の発言を繰り返す政治家は少なくない。明治以降につくり出された画一的な近代国民文化にもとづくナショナル・アイデンティティに親近感をもつ人たちにとって、日本文化は一つであり、日本の国民は単一の民族だという思い込みは実に根深いもののようである。

民俗学の分野で柳田国男が、「山人論」で象徴される日本人が新・旧二つの層で構成されているという考えを放棄し、「一国民俗学」を提唱したのは、周知のように昭和9年（1934）の『民間伝承論』においてである。そこでは英・仏・独などの近代国民国家におけるフォークローア研究の特色を比較しながら、当面「実着の歩みを踏みしめて行く為に、特に先づ一国民俗学の確立を期し、是によりて将来の世界民俗学の素地を用意し」と述べている。そのことから、ここでいう一国民俗学の前提としては、「一国一民族一言語」を標榜する近代国民国家日本があり、

※ 国立民族学博物館名誉教授

そこで柳田が構想した日本文化は、稲作を中心とした単一で同質性のきわめて高い文化であったとみることができる。

このような一国民俗学を成立させるため、柳田は北方のアイヌ文化を「系統の異なる異文化」として切り捨て、南西諸島の文化の中からは本土のそれを類似するもののみを拾い上げて、そこに「遠い昔の先祖の姿」を見出そうとしたのである。その結果、日本文化全体を単一の稲作文化だとする立場が強調され、その文化観が均一な国民文化の形成を指向する国家体制とも結びついて、広く普及するに至ったことは前述の通りである。

他方、民族学の分野では、戦後の間もない時期に岡正雄によって、いくつもの種族文化がこの列島に伝来し、その累積過程によって日本の民族文化が形成されたという学説が提唱された。爾来、石田英一郎・大林太良はじめ多くの民族学者が、日本文化は系譜の異なるさまざまな文化によって構成され、それ故に多元的で多重な構造をもつものと考えてきた。また民俗学者の坪井洋文も「餅なし正月」（イモ正月）の分析などから、日本文化には稲作を基軸とする文化類型の他に、畑作を基軸とする類型の存在することを主張し、柳田の日本文化＝稲作文論を厳しく批判したことは、よく知られる通りである。

筆者も日本文化を単一で同質なものととは考えない。1971年に『稲作以前』を刊行し、縄文時代に稲作とは別種の農耕とその文化がすでに存在していたことを指摘して以来、『縄文文化と日本人』（1986年）『日本史誕生』（1991年）『日本文化の基層を探る』（1993年）などを経て『日本文化の多重構造』（1997年）に至る一連の著作の中で、日本列島には北からの道、南からの道を経由して、さまざまな文化が伝わってきたことを明らかにした。さらに昨年（2009年）に上梓した『日本文化の多様性』（小学館）では、従来行ってきた先史時代に遡る歴史的考察のほかに、地域的空間的視点からの分析を重視し、伝統的な日本文化にみられる東・西の地域差をはじめ、山と森が生み出した非稲作文化や海の文化、あるいは南西諸島を経由して伝えられた南からの文化や北東アジアの民族文化と結びつくアイヌ文化を含む北からの文化の分析などを行った。その結果、日本文化は異なった歴史的系譜と特色を有するいくつもの文化により構成された一種の複合体であり、そうした多様な文化を基礎に成立した日本国は、まさに「多文化の国」と呼ぶべき特質を有することを繰り返し強調したのである。

明治以来の近代国民文化を背景にし、さらに一国民俗学の考えもそれに加って形成された日本文化は一つのものであり、日本国民は単一の民族だというナショナル・アイデンティティに代って、私が新たに主張した「多文化国家日本」というナショナル・アイデンティティを確認することは、さまざまな面で現代の日本人にとってきわめて重要なことだと考えられる。

その一つは、本文の冒頭にも記したような「地域主権」への大きな政治の動きがあるが、それとの関連である。これらの「地域主権」の動きを草の根で支えるものとして、地域の民衆の中に伝承されてきた豊かな伝統文化があるが、その確認と再評価が、いま何よりも必要だとされている。この場合、日本文化は一つではなく、それぞれの地域には異なる文化伝統の存在することを積極的に認める「多文化の国日本」という文化認識が、この種の豊かな地域文化の再

生に大きく寄与することは間違いない。

さらにもう一つ重要な点は、グローバル化が進む「現代」にかかわる問題である。現代は政治や経済や文化の流れが、国家の枠組を超えてボーダーレスに我々に直接及ぶ時代であり、我々自身がさまざまな異文化と直接的に接触し交流し合う時代になったといえる。この時に当って、日本の国家や国民が様々な異文化の世界とわだかまりなく交流するためには、我々自身も「多文化の国」であるというナショナル・アイデンティティをしっかりと持つことが必要である。その認識なしには、多様な世界とうまくお付き合いすることはできないのではないか。だからこそ、いま「多文化国家日本」という認識を確立し、それにもとづく行動が期待される、というのが私の近著の結論であった。

それはそれで間違いない事実である。だが、『日本文化の多様性』という、日本文化の成り立ちとその特色を論ずる本を書きながら、私はそこには書けなかった別の心配事が気になって仕方なかった。それは日本の民族学の最近の動向にもかかわる問題である。日本の学界を知悉するJ・クライナーが『日本民族学の現在』（1996年）の中で「（最近の）日本の民族学の対象がエトノス＝民族であるという点から遠く離れ、むしろより一般的・普遍的な概念である文化が対象となってきている」と指摘したように、民族学から文化人類学へ、最近の学界の研究動向は確かに大きくシフトしてきている。それに伴い個別の民族文化の形成と変遷の比較研究を行う歴史民族学的研究への関心がすっかり衰え、岡正雄以来の伝統ある日本民族文化の起源やその特色の比較研究を志す若い研究者も、最近では民族学（文化人類学）界には、ほとんどみられなくなったようである。この点について「第三期の研究（大林・江守・坪井・佐々木らに代表される戦後第一世代の研究を指す）を受け継ぐ、より若い世代の民族学者による日本民族形成論の研究が低調なことが、今日の難題になっている」（前掲『日本民族学の現在』）という大林太良の指摘は非常に深刻である。

比較民俗学と民族学とは、学問の対象や方法において必ずしも同じではない。しかし、一国民俗学を前提として世界民俗学を構築するという方向ではなく、比較民俗学が日本の民俗文化の特色を、主としてアジアの諸民族文化との比較の中から見直していくという立場に立つならば、比較民俗学と民族学との距離は非常に近くなる。

「古い」といわれるかもしれないが、私は個別の民族文化に強くこだわり、なかでも日本の民族文化の形成とその特色の分析にこだわりつづけてきた。その結果、既述のように日本の民族文化は多元的な起源をもち、それ故に多様な特色をもつことを主張しつづけてきたのである。その結論は、アジアの諸民族文化の比較研究の中から導かれたものであり、そのような点から、私は民俗文化の比較研究に焦点を当てる比較民俗学にある種の親近感をもちながら、その展開に関心を寄せてきた。

今後、比較民俗研究会が、従来やや手薄であった北からの文化にも関心をもちつつ、その研究の実績を積み上げられ、そのことによって民族学との研究交流がより一層盛んになることを、八十路を越えた老民族学者は大きな期待をもって見守りたいと思っている。